

世界の小児科医とともに

東海大学 小児科 齋藤 可奈

開発途上国の小児医療に興味があり、小児科専門医研修を終えた卒業後 6 年目に Liverpool University, School of Tropical Medicine : Master of Tropical Paediatrics (熱帯小児医学修士課程) に留学した。各国で小児科専門研修を修了した小児科医が、開発途上国における小児医療向上に従事するために必要な臨床・疫学スキルを得ること、そして卒業研究として自分自身で開発途上国での臨床研究実施することを目標として、ともに学んだ。

その頃の開発途上国医療といえば、感染症対策が主をなしていた。イギリスへ向かう飛行機の中で、私はマラリアなどの感染症治療の専門家になって、きっと開発途上国で小児科医として働くことになるのだと思っていた。一方で、小児科専門医研修の大半を NICU にて過ごし、新生児医療に没頭していた日々を思いながら、「NICU ともお別れか」と感慨に浸っていた。

同級生 9 名は、ザンビア 1 名、イエメン 1 名、ナイジェリア 1 名、スーダン 1 名、スペイン 2 名、イギリス 2 名、日本 (私) 1 名と様々な背景を持った小児科医が集まっていた。意気揚々と始まった留学生活であったが、コースが始まって 1 週間もたたないうちに、「私が開発途上国に行って小児科医として働く必要はないのかもしれない」と思い悩むようになった。なぜならば、開発途上国からやってきた小児科医たちは、今思えば当たり前だが、開発途上国の小児医療の専門家であったからだ。ザンビアの小児科医から先天性マラリアの診断を、イエメンの小児科からコレラのアウトブレイク対策を、ナイジェリアの小児科医から蛇咬傷の治療と小学校での予防活動を学んだ。印象的であったのは、スーダンの小児科医から学んだ重症低栄養児の治療であった。それは日本の NICU 診療に通ずる繊細な集中治療管理であると感じた。

そんな毎日を過ごしていた 3 か月後のある日、小児科医/助産師コースの共通クラスで新生児蘇生実習が行われることになった。この実習では、小児科医が助産師に新生児蘇生トレーニングを提供する。私は、いつも通り、マスクバギング、胸骨圧迫、挿管、臍帯カテーテル挿入、薬剤投与についてシナリオを用いた実習を開始した。すると、一人また一人と私の周りにクラスメートが集まって、彼らが新生児蘇生において遭遇し困った経験を話しはじめた。私は、彼らの遭遇した経験に準じたシナリオで新生児蘇生実習を行った。経験をもとにしたシナリオ実習は興味をひいたようであり、実習の終わりには、教授も含むすべてのクラスメートが参加する程の盛況ぶりであった。この時、私は心から役に立つことができたと感じた。そして、開発途上国における新生児医療の必要性、臨床経験に裏打ちされた指導が学ぶ人たちの心を打ち、学ぶ意欲を高めることを確信した。

それから、10 年以上の月日がたち、私は新生児科医として NICU で働きながら、WHO 周産期ガイドライン作成に関わっている。もし今、イギリス留学に向かう飛行機の中の自分に話しかけることができるのであれば、

「情熱があれば、NICU も国際保健もどちらもできるよ」と声をかけてあげたい。そして、私の経験がキャリアに悩む若い小児科医を勇気づけることができれば、とてもうれしく思う。

【著者略歴】 齋藤 可奈 さいとう かな

2005 年 聖マリアンナ医科大学卒業、日本にて初期研修、小児科専門医研修を実施。

上記大学院修了後 WHO 勤務を経て、日本・カナダにて新生児科医研修を実施。

現在 東海大学 NICU 講師。一緒に NICU で働く仲間を募集中。

～ダイバーシティ・キャリア形成委員会より～

「広い世界へ飛び出してみよう！情熱を胸に」

将来何をしたいのか、何をすべきなのか、若い先生方には迷っている方もいるかもしれません。そのようなときには少し違う方向に歩いてみるのはいかがでしょうか。広い世界に飛び出すと、今まで見えなかった景色が見えます。そこは学びの宝庫で、言葉、食べ物、生活習慣、そして医療の在り方も、日本で当たり前のことが当たり前ではなく、新しく刺激的なことに満ちています。その中で新たな気づきが得られ、自分が何をしたいか、見えてくることがあるのではないのでしょうか。

日本の医療は欧米と比較して遜色ないレベルに達し、海外に学びに行くことの必要性を感じにくくなったのかもしれません。海外に行くためには、まずはあれもこれもできるようにならないといけない、と躊躇することもあるでしょう。でも心配なくて大丈夫。海外に一步踏み出してみると、想像していなかった世界が広がり、情熱さえあれば、多くの学びと経験、そして仲間を得ることができます。結果的に寄り道になったとしても、自分が得た経験や仲間は自分の財産として残り、必ずこれからの成長の糧になってくれます。それらの経験をつなぎ合わせて人生は創られていきます。情熱を持てることがあれば常にチャレンジしてみましょう。新しい経験がこれまでの経験と融合して、きっと新たな道が見えてくる、そのことを齋藤先生は私たちに教えてくれているように思いました。

